

《京都》御所と離宮の栞



其の十一

— 京都御所 —

円山派の絵師が画いた「鶴」



おはなごてん
御花御殿上の間北側

おうきよ
円山派は円山応挙を祖とし、写生画や西洋の遠近法を研究して独自の画風で活躍した流派です。京都御所の安政度御造営の折に、円山派として同時期に活躍した二人の絵師が、鶴に関する障壁画を画いています。(応挙の障壁画は栞[其の九](#)で紹介)

らいしやう おはなごてん ぐんかくしやうばい
一人は中島来章で、御花御殿上の間に「群鶴松梅」という題材で障壁画を15面画いています。(御花御殿は御常御殿や御涼所などの北側にあり、皇太子のお住まいなどに充てられた御殿)

おうずい
来章は円山応瑞(円山派2代目・応挙の長男)に師事して幕末から明治初期にかけて活躍した絵師で、四条派の横山清(せい)暉、塩川文麟(ふんりん) ([栞其の六](#)で紹介)、岸派の岸連山(れんざん) (今後紹介予定)と共に「平安四名家」と称されました。

安政度御造営の折に、来章は「群鶴松梅」の他にも障壁画を担当しています。(詳細は次頁別表)



御花御殿上の間西側

もう一人は多村拳秀で、若宮御殿二の間に「梅に鶴」という題材で障壁画を16面画いています。(若宮御殿は、京都御所内の北側にあり、皇子が使用した建物で、明治天皇も幼少の頃使用されました)

前頁に挙げた平安四名家と称された人物達ほど評価は高くなかった拳秀ではありますが、画家として一定の評価を得ていたことは、『平安人物志』(江戸時代に発行された京都の様々な文化に関する人名録)に文政13年(1830)版から慶応3年(1867)版に名前があったり、安政3年の『平安画家評判記』(番付形式で当時の画家の評価を記す)に載せられていることから分かります。

平安画家評判記	
順位	人物
1	がんだい 岸 岱
2	かのうえい 狩野永岳
3	横山清暉
4	中島来章
5	岸連山
9	塩川文麟
40	多村拳秀

※主要な人物のみ抜粋

鶴は七福神の一人に数えられる福祿寿が従えたとされています。千年生きるとされ長寿を表す瑞鳥として扱われ、万年生きるとされる亀と共に長寿の象徴として画題にも取り上げられます。京都御所の障壁画にも様々な絵師が様々な画題で鶴を画いています。



わかみやごてん
若宮御殿二の間西側



若宮御殿二の間南側

安政御造営時に担当した障壁画の一覧				
絵師名	御殿名	部屋名	画題	枚数
中島来章	御常御殿	御小座敷上の間	和歌之意	18面
	御常御殿	御小座敷上の間	なくうぐいす 花に鳴鶯	4面(小襖)
	御常御殿	御小座敷上の間	すむかえる 水に住蛙	2面(小襖)
	御常御殿	南廂	たのうえのかり 田上雁	2面
	御常御殿	南廂東方	なみのうえのつる 波上鶴	2面
	御花御殿	上の間	群鶴松梅	15面
多村拳秀	御涼所	上の間	志賀春の景	34面
	御涼所	上の間	小鳥	4面(小襖)
	御涼所	上の間	ゆうぎよみずくさ 遊魚水草	2面(小襖)
	若宮御殿	二の間	梅に鶴	16面



しやだいぶ
諸大夫の間「鶴」狩野永岳筆(葉其の一で紹介)

「寿老人」は中国において長寿を授ける道教の神仙とされています。日本においても長寿の神とされ、七福神にも数えられています(地域により七福神に数えられない場合もあり)。寿老人は南極老人(南極星の化身)ともいわれ、同じく南極老人といわれた福祿寿と合体神とされることがあります。



お み ま にしごえんざしき
御三間 西御縁座敷に画かれている福井徳元筆「寿老人」

「寿老人」は古くから画かれていた画題のひとつで、長頭の老人が、巻物が付いている杖と団扇を持ち、鹿を連れているのが特徴です。

ここでは「寿老人」と題された作品3件を紹介します。

1件目は福井徳元が御三間の西御縁座敷に画いた杉戸絵です。長頭の老人が巻物と団扇の付いた杖を持ち、鹿を連れている様子が画かれています。(写真:左)

2件目は山本探斎が皇后宮常御殿の北御縁座敷に画いた杉戸絵です。こちらは鹿ではなく鶴が画かれており、寿老人は如意を所持しています。(写真:下段左)

如意は竹や木、角などで作られ、孫の手のように使われたものが後には威儀を正すために用いられたとされています。(詳細写真:下段右)



こうごうぐうつねごてん きたごえんざしき
皇后宮常御殿 北御縁座敷に画かれている 山本探斎筆「寿老人」





杉戸の右面に画かれている人物が
持っている杖には^{れいし}霊芝(万年茸という
キノコを干した物)が付いています。

(詳細写真: 上段右側)

霊芝は、不老長寿に効くとされ長寿を
表す物として寿老人図にも画かれま
す。

3件目は、「竹に亀」^{ぶく}「寿老人」^{かのうとうはく}「松に鶴」^{なかのぶ}の3幅一組となっている、狩野洞白(愛信・1772～1821)が絹地に画いた掛軸です。鹿は引き連れてはいませんが、巻物と団扇のついた杖を持つ長頭の老人が画かれています(写真: 下段中央)。本紙(絵が画かれている部分)は、高さが137.8cm、幅が61.1cm(総寸法 高さ:260cm 幅:79.4cm)ある大きなものです。

この絵を画いた洞白は駿河台狩野家の5代目として活躍した絵師で、駿河台狩野家は探幽の養子洞雲(益信)から始まる家系です。



か の う とう は く な か の ぶ
掛軸 「竹に亀」 「寿老人」 「松に鶴」 作者 狩野洞白(愛信)



みす 御 簾

御簾は部屋の間仕切りや遮光などのために用いられた調度品で、京都御所の御簾は細かく裂いた竹を編んで製作されています。

主のいる部屋からみて鴨居の内側に垂らすものを「うちみす内御簾」といい、同じく鴨居の外側に垂らすものを「おおいみす覆御簾」といいます。



覆御簾(紫宸殿)



内御簾(小御所・中段の間から上段の間を望む)



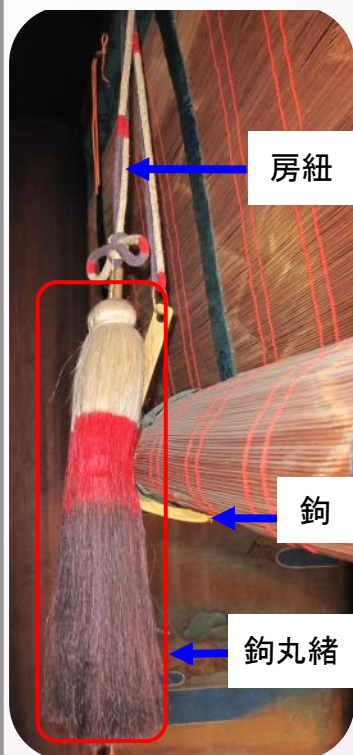
清涼殿に掛けられている御簾



むめかもい
御簾は鴨居や無目鴨居(溝の無い鴨居)にあるL字型の折釘や壺金物に、御簾の上部からでている紐やS字の金物で取りつけます。

御簾には上部からU字型の金具の「^こ鉤」と、「^{こまるお}鉤丸緒（^{こまる}鉤丸）」という飾りの房が吊り下げられています。御簾を巻き上げるときは「^こ鉤」に掛けます。（詳細写真：上段左）

京都御所にある御簾の鉤丸緒は麻製で、3段に分けて染められています。紫宸殿や小御所は上から黄・赤・黒、清涼殿は白・赤・薄紫で作られています。（詳細写真：上段右）



鉤（拡大）



鉤丸緒（左：小御所・右：清涼殿）

鉤丸緒は房紐により吊り下げられていますが、その房紐は写真にあるように「^{あげまきむす}総角結び（揚巻結び）」という方法で結んでいます。この総角結びは様々な調度品の飾りなどにも用いられています。



ゆするつき
総角結びが施されている調度品（^{ゆするつき}沓坏）

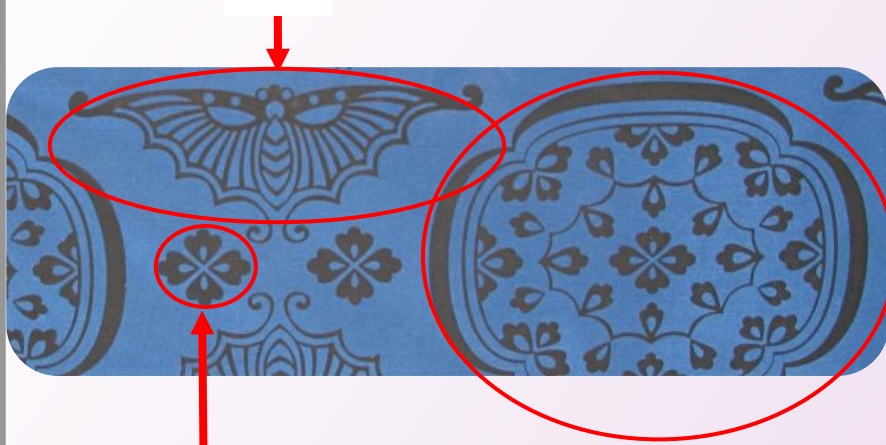


清涼殿御帳台の前にある御簾



小御所にある御簾

伏蝶



花菱

窠

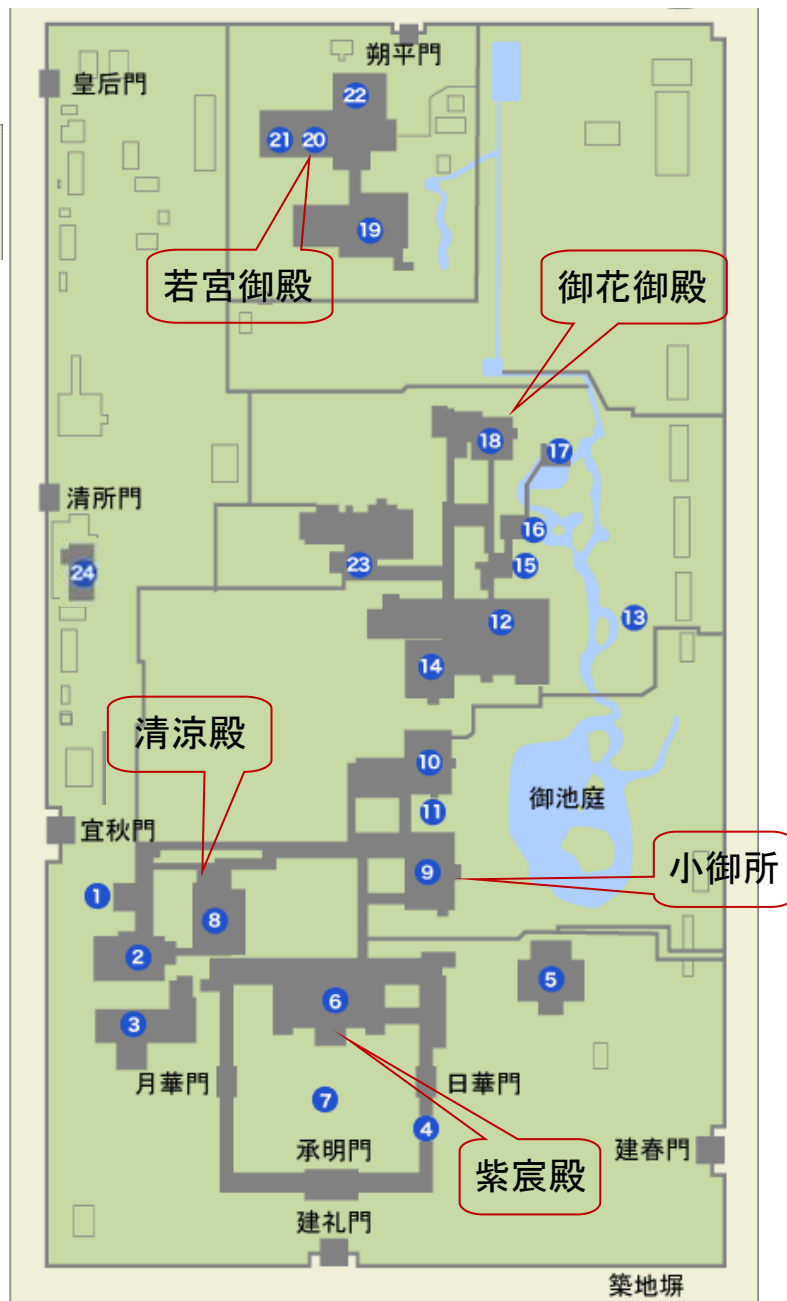
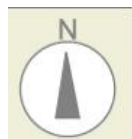
御簾の上部の横に張った縁は「
もこう
帽額」と呼ばれます。京都御所の御
ふせちよう か もっこう
簾には伏蝶や窠(木瓜)の文様が表さ
れています。



上の写真は[葉其の四](#)で紹介した屏風「源氏の図」の一部分で、そこには御簾を巻き上げた建物で対面している様子(左)と、男女が下ろした御簾越しに話をしている様子(右)が画かれています。御簾は奈良時代には中国よりすでに伝えられていたとのことですが、内裏において日常的に使用され始めた時期は不明です。しかし、空間の分割はもとより、天皇の服喪や不遇(体調不良)など状態をあらわす室礼として重要な役割を担っていたようです。

京都御所案内図

- ① 御車寄
- ② 諸大夫の間
- ③ 新御車寄
- ④ 回廊
- ⑤ 春興殿
- ⑥ 紫宸殿
- ⑦ 南庭
- ⑧ 清涼殿
- ⑨ 小御所
- ⑩ 御学問所
- ⑪ 蹴鞠の庭
- ⑫ 御常御殿
- ⑬ 御内庭
- ⑭ 御三間
- ⑮ 迎春
- ⑯ 御涼所
- ⑰ 聴雪
- ⑱ 御花御殿
- ⑲ 皇后宮常御殿
- ⑳ 若宮御殿
- ㉑ 姫宮御殿
- ㉒ 飛香舎
- ㉓ 参内殿
- ㉔ 参観者休所



㉔ マークは、御所・離宮の外側から、いつでもご覧になれます。

㉔ マークは、参観でご覧になれます。申込み方法は、[参観要領 - 京都御所 \(kunaicho.go.jp\)](http://kunaicho.go.jp) をご覧ください。

㉔ マークは、春と秋には申込みが必要のない一般公開の際にご覧になれます。下記にて日程等をご確認ください。 [特別公開など - 宮内庁 \(kunaicho.go.jp\)](http://kunaicho.go.jp)

㉔ マークは、通常公開していない場所にあります。

これまでの「《京都》御所と離宮の葉」については、
宮内庁ホームページの[こちら](#)からご覧ください。

<問い合わせ先>

〒602-8611 京都市上京区京都御苑 3

宮内庁京都事務所 代表電話：075-211-1211

参観係直通電話：075-211-1215

其の十一：平成27年1月26日発行